## 聖地のこどもニュース

# 記切っつるの記

No. **/ 2** 2019年 5月



スタディ・ツアーでの一コマ。イスラム教の聖地ハラム・エッシャリフ、「岩のドーム」前で。(エルサレム)

#### 二つのメモリアル・デイ

5月2日朝10時、今年もイスラエル全土に2分間のサイレンが鳴り響きました。すべての人が仕事の手を止め、歩みを止め、黙祷を捧げました。600万人のホロコーストの犠牲者を悼むためです。筆舌に尽くしがたい悲劇を体験した民族が心を一つにするひと時です。

また5月7日には、イスラエル・パレスチナ紛争の遺族数千人がテルアビブに集結し、犠牲者を追悼しました。イスラエル・パレスチナ双方の遺族で結成するNGOその他の平和団体 "ペアレンツ・サークル"の主催です。アメリカやその他の国々からもインターネットで参加し、またヨルダン川西岸地区から約100人のパレスチナ人が種々の困難を乗り越えて参加しました。 \*8ページに写真を掲載しています

紛争の行方を憂い、たくさんの人が解決の糸口を見つけるため活動しています。 私たち もその一端を担うことができればと念じています。 理事長 井上 弘子



## 認定NPO法人 聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター (JANIC)によるアカウンタビリティ セルフチェックを受け、基準の4分 野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 **Email** ispalejpn@gmail.com **Ⅲ/Ⅲ** 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 INPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

https://seichi-no-kodomo.org

# イスラエル・パレスチナ問題の根深さを知った10日間

池上 遙 (エルサレム在住)

#### スタディ・ツアーに参加した理由

国際協力機関に勤める夫がパレスチナに駐在することになり、私は、昨年の秋よりエルサレムに住んでいる。楽しい日々を過ごしているが、同時に、イスラエルとパレスチナの対立を日常的に目の当たりにし、胸が張り裂けそうな思いもしてきた。にもかかわらず、この問題に対して何も貢献できない自分に焦りを感じていた。そんな矢先にスタディ・ツアーの案内を頂き、何かヒントが得られるかもしれないと思い、参加することにした。

#### スタディ・ツアーの内容

普段、日常生活を送っているだけでは行けないような場所へ行き、様々な人と交流することができた10日間のプログラムであった。

- ◆パレスチナの教育事情とは?(大学、小学校、聴 覚障害児の学校を訪問)
- ◆中東の男女差別問題とは?(名誉殺人の被害にあう子供·女性の保護施設を訪問)
- ◆日本政府によるパレスチナ支援とは?(ジェリコにある工業団地、養蜂工場を訪問)
- ◆ユダヤ人の歴史とは?(エルサレムにあるホロコースト博物館など訪問)
- ◆現地の人々の日常生活とは?(一般家庭でホームステイを経験)
- ◆イスラエル・パレスチナ問題とは?(パレスチナ人のための人権保護団体、パレスチナの難民キャンプ、入植地などを訪問)
- ◆現地の大学生と交流 (ヘブライ大学 〈イスラエル〉、ベツレヘム大学 〈パレスチナ〉 訪問)

#### ツアーを終えて感じたこと

想像していた以上に複雑な問題であることがわかり、ますます頭が混乱した。絶望したような心持にさえなった。イスラエル人もパレスチナ人もみな「私は平和を望む」と口々に言うが、平和の定義が

異なり、時にその行動が相手を傷つけてるのだ。どうしたらイスラエル人もパレスチナ人も幸せになれるのか? 妥協点はあるのか? 疑問は尽きないが、私にとってツアーに参加した意義は大きい。まず、今の私の知識レベルでは到底この問題に立ち向かえないことを認識。これまで「何かこの問題に貢献したい!」と思っていた自分が恥ずかしいくらいだ。今後、正しい事実を学び、自分なりの意見を持ちたい。そして、ツアーでの人の出会いを大切に、自分にできる範囲で行動も起こしていく。今回のツアーで感じた「絶望」は決してマイナスな意味だけでなく、ここを起点とし、この国の「真」の平和に本気で貢献するための重要な感情であると今は理解している。

#### 「願う」以上のことができるように!

#### 山田涼華(大学1年生)

12日間のツアーで受けた感動とショックは、自分では抱えきれないほど大きいものだった。

#### 名誉殺人を逃れて育つ子供たち

ベツレヘムで訪れた場所の一つに、未婚の女性から産まれたことで名誉殺人の犠牲者になるはずだった子供たちを保護する施設「クレーシュ」がある。ここで育つ子どもたちは、戸籍上の問題で一生パレスチナから出ることができない。

何も知らず無邪気に遊ぶ子どもたちが、自分で選べない出生のせいで生涯移動の自由を奪われる、 という話にショックを受けた。全ての子供たちの将 来が自由で幸せになるように、自分に何かできない かと初めて真剣に考えた。

#### パレスチナの学生の将来

西岸地区のデヘイシャ難民キャンプでは、パレス チナ人学生たちの話を聞いた。

もちろん、難民キャンプの貧しい状況で大学に 進学することは容易ではない。進学のチャンスを掴 んでも、国際関係や科学を専攻するとイスラエル政 府から目をつけられるそうだ。日本では当たり前の 学問の自由。しかしパレスチナ人にとっては、興味のままに学ぶことすら難しい。同じ学生の立場として、理不尽な現状に悲しみ、怒りが湧いた。

#### 紛争が他人事でなくなる

ツアー中は比較的落ち着いていたが、今、情勢は 再び悪化している。スタディ・ツアーで訪問したデヘイシャ・キャンプでも、18歳の若者がイスラエル軍 に殺害されたそうだ。イスラエル人学生が「今は静か (silent) な状態だけど、これは平和 (peace) ではない」と繰り返し語っていた。イスラエル・パレス チナにおいて、「静かな状態」が如何に脆いものかを痛感した。

帰国してから、報道が前より心に重くのしかかる。出会った人々がどんなに苦しい状況でも、自分は無事を祈るしかできないのがもどかしい。いつかまた、イスラエル・パレスチナ、特にパレスチナ難民キャンプを再訪したい。その時には無事を願う以上のことができる自分になっていたい。

### 小さくても、できることに目を向けてみる 古川 遙(大学1年生)

帰国して日が経ってからも、得体の知れないモヤ モヤが取れずにいた。現地から、何か重たい鉛みた いなものを持って帰ってきたような気分でいた。

"「平和」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか?"これは、事前研修のひとつで、スタディ・ツアーが終わった今でもなぜか印象に残っていた。もちろん、答えは人それぞれ。

「人権が保障されている状態」「戦争がない世界」 と答える人もいれば、「家族や友達と何気ない会話 をしている時間」と答える人もいた。全て正解だろ う。「平和」の考え方なんて人によって違うのは当 たり前だ。

みんなが平和を願えば、世界は良くなるに決まっている、と思っていた。

現地でも、パレスチナ人の考える「平和」とイスラエル人の考える「平和」を間接的に知る機会があった。パレスチナ人と話していても、イスラエル人と話

しても、ひしひしと伝わってくる、強く「平和」を望む気持ち。しかし、聞いてみると、彼らの望む「平和」の定義が異なり、それを求める過程で対立を生んでしまっていることがわかった。

「平和」を願う気持ちさえあれば、物事が悪い方向に進むことはないだろう。そんな風に考えていた私にとって、そのような対立が起こってしまうのを認識できたのは大きかった。

また、パレスチナ人が腐敗しているPLO(パレスチナ解放機構)に対して半ば諦めかけてしまっていて、ますますイスラエルが勢力を広げていることを実際に目にしたことも衝撃的だった。

「どこに妥協点があるのか」「パレスチナはこのまま飲み込まれるのではないか」。疑問は尽きず、納得のいく回答を得られないまま帰国した。

今思うと、ずっと私の中にあった「モヤモヤ」は、 自分の仮説が本当に仮説でしかなかったことの悔 しさと、解決の兆しが全く見えないことからくる無 力感が原因だったのかもしれない。

「平和」を手に入れるために良かれと思ってすることが、相手を傷つけてしまうこと。歴史的背景や宗教的背景も根深く、複雑に関わっていること。第三者の自分にできることは何もないのではないか。帰国してずっとそう思っていた。しかし、日にちが経ち、事後研修を終えた今は、小さなことから始めるのを大切にしてもいいのではないか、悲観的になるよりも、草の根から「人」に期待してもいいのではないか、と思えるようになった。

目に見える変化を起こすには、大きな組織が介入したり政策や制度を改める必要があるかもしれない。しかし、第三者の立場から、イスラエル・パレスチナの学生に話し合う場を設けたり、子どもたちの教育を支援したりすることは、平和の種を蒔いていることなのではないかと思う。変化は見えにくいし、時間はかかるかもしれないが、その種がいずれ花咲く時が来る気がする。

私も実は、その種の一つになった気持ちでいる。 せっかくこんなに沢山の人に出会い、その想いに触れたのだから、ぜひ花を咲かせたい。そんなことを 思わせてくれるツアーだった。

## イスラエルの右派政権継続、世論の右傾化変わらず

村上 宏一(当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

前号で報告したイスラエル総選挙が4月9日に 投票、即日開票されました。結果は、ネタニヤフ 首相が率いる右派「リクード」と、選挙直前にで きた中道統一会派「青と白」が共に35議席と第 一党を分け合い、「シャス」「ユダヤ教連合」の宗 教政党が8議席ずつ、選挙前に野党の中道左派 統一会派の中核だった「労働党」はわずか6議 席、などとなりました。

前回、軍の元参謀総長ガンツ氏が新党「イスラエルに力を」を立ち上げたことを書きましたが、その後すぐ、野党の一角を担っていた中道左派政党「イェシュ・アティッド」と提携して「青と白」を結成し、選挙に臨みました。青と白は国旗の色。イスラエルの旗のもと、すべての国民が一つになろう、との意味を込めています。

ガンツ氏の元軍指導者としての信望とネタニヤフ氏の汚職疑惑もあって、青と白は単独で第一党の勢いという世論調査報道もあったほどです。それが票を開けてみると、リクードも議席を増やして第一党を維持するという結果になりました。そして、国会の120議席のうち過半数を右派・宗教政党が占め、結局、前回2015年の選挙後と同じ右派色の強い連立政権ができることが確実となりました。

#### 右派・宗教政党で過半数

ここで党・会派の消長を見てみましょう。

(左側は前回選挙、右側は今回の結果。カッコの中は議席数)

リクード(30) ⇒ リクード(35)

クラヌー (10)  $\Rightarrow$  クラヌー (4)

ユダヤの家(8)⇒ 右派連合(5)

イスラエル我が家(6) ⇒イスラエル我が家(5)

〈以上、右派・極右=計49〉

シャス(6) ⇒シャス(8)

ユダヤ教連合(6) ⇒ ユダヤ教連合(8)

〈以上、宗教政党=計16〉

シオニスト連合 (24=うち労働党19) ⇒ 労働党 (6) イェシュ·アティッド (11) ⇒青と白 (35) ※新党·イスラエルに力をと提携 メレツ (5) ⇒メレツ (4)

〈以上、中道左派·左派=計45〉 アラブ統一会派 (13) ⇒ハダシュ·タアル (6)

⇒ラアム・バラッド (4) 〈以上、アラブ政党=計10〉

イスラエルでは、一つの政党が選挙で国会の 過半数を制したことはなく、大統領から内閣を構 成できそうだとして首相候補に指名された政党 の党首が、連立交渉をして組閣します。前回選挙 後に連立政権に参加した6会派(うち「ユダヤの 家」は解散、再統合して「右派連合」に)は、いず れも議席を獲得して合計65議席と、過半数を超 えました。ネタニヤフ氏はさっそく各会派と交渉 しており、同様の右派政権ができるとみられてい

#### 治安を前面、米国が後押し

ネタニヤフ首相は選挙戦で安全保障問題を強調、強力なライバルのガンツ氏を左派と決めつけるキャンペーンを展開しました。パレスチナ側に譲歩するような和平はイスラエルに危険をもたらすという論法で、和平を口にする左派に政権を渡すなと訴える作戦をとったのです。2015年の前回選挙でも、パレスチナ和平の根幹と見なされる二国家共存案を否定するなど、和平に否定的な発言で右派票を引き付ける作戦に出ました。選挙後には修正する姿勢も見せましたが、今回はいっそう有権者の危機感を煽る発言を強め、選挙戦終盤の4月6日には、首相に再選されたらヨルダン川西岸のユダヤ人入植地をイスラエル領に併合するとまで明言しました。

戦争で占領した土地を併合するのは国連安保理決議に違反する行為ですが、そんなことに構わずネタニヤフ氏を後押ししたのがトランプ米大統領でした。2017年12月に、イスラエルが一方的

に首都と宣言しているエルサレムについて、国際社会の批判をものともせず首都と認めたのがその一歩。今回の選挙戦さ中の3月21日には、ゴラン高原に対するイスラエルの主権を認めると宣言しました。1967年の第3次中東戦争でイスラエルがシリアから奪って占領し、81年に一方的に併合を宣言していたもので、やはり安保理決議に違反する行為です。

西岸とガザが形ばかりとはいえパレスチナ自 治区であるのに対し、イスラエルの実効支配が半 世紀続いているゴラン高原について、今さらのよ うにイスラエルの主権を認めると言ったのには訳 があります。イスラエルは昨今、イランは国の安 全保障にとって大きな脅威であると、しきりに強 調しています。そのイランがシリア国内に軍事基 地をつくったことで危機感が強まり、今年1月20 日にイスラエル空軍機が、シリアの首都ダマスカ ス近郊のイラン革命防衛隊基地など数カ所を攻 撃する軍事行動まで起こしました。ゴラン高原は 安全保障のため手放せない要衝・最前線である というイスラエル側の主張を支える意味が、トラ ンプ大統領の宣言にはあります。ちなみにトラン プ大統領は、イスラエルの選挙投票日直前の4月 8日、イランの革命防衛隊を外国テロ組織に指定 しました。

エルサレムの首都承認、ゴラン高原の領有承認などの米国からの後押し政策についてネタニヤフ氏は、自分とトランプ氏の信頼関係が引き出したと自賛、選挙戦に大いに利用しました。それがどれくらい効いたかは単純に測りようがありませんが、「イスラエルの安全を保障できるのは自分だけだ」と訴えるネタニヤフ氏が支持されたのは、選挙結果が示しています。

#### 和平派の主張に力なし

一方のガンツ氏陣営は、軍参謀総長の経歴を 背景に、武力で平和を確保することはできないと して、パレスチナ側との和平交渉復活が必要との 立場をとっていました。しかし、報道によるとガンツ氏は、治安を強調するネタニヤフ路線に対し、パレスチナ問題で明確な姿勢を示そうとしなかったようです。世論を和平路線へ引っ張ろうとするより、右傾化の風潮に迎合したという論評もありました。入植地を併合するというネタニヤフ発言にも、これは二国家共存による和平構想を否定するものであるにもかかわらず、明確な批判を加えなかったそうです。

野党側には、ネタニヤフ首相の汚職疑惑という追い風もあったはずでした。選挙前の2月に検事総長が、収賄などの疑いでネタニヤフ氏を起訴する方針を明らかにしていたからです。しかし有権者の多くは、汚職容疑者として倫理性を問うよりも、イスラエルの安全保障を確かなものにするリーダーとして見る方を優先したようです。

では、実際にネタニヤフ氏は起訴されるのか。 議会での多数勢力に物を言わせて免責法案を成立させ、訴追を免れようとするとの見方もあります。ただ、連立に引き入れて法案に賛成してもらうためには、目標の異なる各党の、互いに矛盾する要求をも聞き入れなければなりません。特に、徴兵を免れているユダヤ教神学校生を兵役に就かせる法の制定を主張するイスラエル我が家と、それに強く反対する宗教政党は、共に連立政権に必要な議席数を背景に妥協の姿勢を見せず、説得は容易でなさそうです。



今回の選挙結果から見えたことは、右傾化したイスラエル世論に変化の兆しはなさそうだということです。対立の根を断ち和平による真の安全確保をという、遠くて見えにくい理想よりも、力を見せつけて相手を抑え込むという、わかりやすい訴えの方が受けているのです。右派勢力の優位は続くでしょう。ただし、近くできる連立政権は危ういバランスの上に立つもので、これからもイスラエル政局からは目が離せません。

# PROJECT 2019

#### イスラエル・パレスチナからの参加者をご紹介します



マタン・マスラウィ (22歳) イスラエル人

趣味は演劇と読書。自 分の知を愛しているがいっているが、カロの紛争を悲しているがいく思しているがいる。 兵力ではいる。 兵地区にもあるが、カロのではない。 一つではいいでする。 はないにでいいでいるできたができたが、 ではないにでいいでるできたができたができます。 はないにでいいでるできたができます。 はないにでいいでるできたができます。 はないにでいいでるできたができます。 はないにでいいでるできます。 はないにでいいでるできます。 はないにでいいでるできます。 はないにできますがない。



**タル・ギロ** (**24歳)** イスラエル人

障害児やホロコースト生存者のためのボランティア活動をして、人の心に寄り添い「聴く」ことを学んだ。紛争解決には暴力ではなく対話による相互理が絶対に必要だと考える。イスラエル・パレスチナスの対話が発しいが、苦しむ貧しいが、苦しむ質き去りにいるのが残念だ。日本での中の架け橋プロジェクトを楽しみにしている。



**シャロン・バラク** (**22歳**) イスラエル人



オール・ガダ (22歳) イスラエル人



**ダリーヌ・ラマ** (25歳) パレスチナ人

私は中東の平和を願っている。信仰や肌の色や社会的地位がなんであれ、みんなが平等の権利を持ち、表現の自由がある社会が必要だと思う。私たちはみんな同じことを望んでいる。それは平和に暮らすことだ。そのためには世界中の人々と協力したい。私は生来楽観的で誰とでも友だちになれる性格である。だから日本で、パレスチナ人から、日本人から、たくさんの意見を聞きたいと思う。

キブツに生まれ育ち、そこで哲学や ユダヤ教を学んだ。現在は英語教師を している。音楽に造詣が深く、いろい ろな楽器をこなす。このプロジェクト に参加した友人から話を聴いて、双方 の壁を取り除き、またイスラエル人側 が対話の糸口を作ることがどれほど 大切かを痛感した。すべての人は自分 の夢を実現するために平等のチャンス が与えられるべきだと思う。

ラマラのビルゼイト大学で経営学を 学び、現在フォトグラファー。2年前に このプロジェクトに参加した姉から、 異なるメンタリティーや文化を持つ 人々と交わり、多様性を受け入れあっ て友情を結ぶことがどれほど大切か を教えられた。平和は、互いに認め、 愛し、尊敬し合うことから始まると思 う。イスラエル人もパレスチナ人も同じ 人間なのだから、心を開けば、対話と 相互理解は可能なのだと。

## 2019プロジェクトのあらまし

日 程 2019年 **8月6日(火)~22日(木)【17日間**】

プログラム

#### 仙台・長野で国際文化交流、ボランティア活動など

仙台では東日本大震災の経験に学び、長野では善光寺での仏教体験やボランティア活動。各地の市民と親しく交流します。イスラエル、パレスチナの紛争体験を語る集いでは、日本の皆さまに最新の紛争事情をお知らせします。

#### 東京 JICAにてワークショップ

プロジェクトの体験を共有し、平和実現の道について考えます。一般の学生、社会人に平和メッセージを発信します。

細部は計画中





イスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者とともに、共同生活、ボランティア活動、市民交流をとおして、平和共存の可能性を体験します。長野と東京で、人々とのふれ合いを通して互いに相手を大切にすることを学び、平和といのちについて考えます。

## 緊迫が続く聖地から生の声を発信!

武力行使やテロによる不安と隣り合わせの生活体験、深刻さを増す教育事情など、日本の皆さまに、紛争地に暮らす人々の生の声をお届けします。



パトリシア・ズロブ (23歳) パレスチナ人

ベツレヘム大学で数学を専 攻、現在は音楽教師。 過去の 参加者から、育ちも考え方も 異なる青年たちがディスカッ ションし、和解と平和への道 を探るこのプロジェクトがど れほど大切かを聞いた。イス ラエル人だけでなく日本の 仲間たちからも、個人的な体 験を聞くのを楽しみにしてい る。平和構築のためには国籍 も宗教も肌の色も関係なく、 ただ同じ人間として接するこ とだと思う。



ムアット・アブ ス ネイネ(20歳) パレスチナ人

住まいが東エルサレム、職 場が西エルサレムなので、イス ラエル人とパレスチナ人の間 を行ったり来たり、日常生活 の中で両サイドの違いを肌で 感じている。双方のより良い 未来を心から念じている。

日本で行われるこのプロ ジェクトで、日本人が私たちの 間で素晴らしい仲介者として 役割を果たしてくれるだろうと 期待している。私の理想は、分 裂のない社会、みんなが学校 に行けて同じ教育を受け、誰 も自分の宗教や出自などを恥 じなくても良い社会だ。



(23歳) イスラエル国籍アラブ人たい。

ハンナ・フーリ

イスラエル公認ガイド。観光ガイド として、日々多くの国の人と接してい るが、彼らの多様性を受け入れ理解す るためにも、まず自分自身のアイデン ティティーをしっかりと持たなければ ならないことを自覚させられる。日々 の生活の中で実感することは、小さな ことから始めれば、平和のために誰で も働くことができるということだ。

もし何もしないのなら各々の責任 は大きい。特に若い世代にそれを訴え



マラック・キナニ (18歳)

私は幸いなことに幼稚園から、イ スラエル人とアラブ人が一緒に学ぶ ハンド・イン・ハンドで教育を受けて きた。だからそこでは怖れることな く自分の意見を率直に述べることが できた。互いの立場の違いを認め合 い、理解しようと努めることこそ、平 和への第一歩だと教えられたから だ。私は、私たち一人ひとりの若者が 現状を改善し、イスラエル・パレスチ ナ人一人ひとりの自由を確保するよ イスラエル国籍アラブ人う、責任を負っていると考える。

> 私は将来看護師になって、苦しんで いる人々の奉仕をしたい。



#### 関連イベント

お問い合わせは… TEL 03-6908-6571 (当法人事務局) TEL 090-6538-3255 (井上)

聖地・中東の今を知る講演会



感謝のチャリティ・コンサート

## ヤクーブ・ガザウィ イプオルガンの

「聖墳墓教会 | (エルサレム)首席才 ルガニストによる日本の皆様へ の感謝のコンサートです。8月下 旬から9月中旬にかけて、東京な どで複数回開催予定。詳細は次 号でお知らせします。

> 聖墳墓教会(エルサレム)で▶ 演奏中のヤクーブ





▲5月2日ホロコースト犠牲者のための追悼の2分間。 イスラエル全土で人も車もすべて動きを止めて祈る。



ブ)。和解と平和を求めて、7000人が集まった。

#### 2019 スタディ・ツアーのー



ヨゼフ学院 (エルサレム) の授業風景。昨年から男女共学になりました。



▲ アイーダ難民キャンプ見学。先頭は案内役のハムダンさん。 難民キャンプで生まれ、障害を乗りこえて、ツアーガイドとして キャンプの情報発信をしている。(ベツレヘム)



▲絞りたてのジュースでほっと一息。「おいしいね!」(エルサレム)

#### 街で出会った子どもたち



▲ラマラ市主催 「こどもマラソンデー」。子どもたちが両親と一緒に ▲オリーブの植樹祭で、苗木を植える子どもたち。(ラマラ) 仮装して走った。

